

教 仏 庵 草

第180号
(発行日)
2005年6月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX
(0798) 63-4488
(発行人) 土井紀明
メール: kousien2720@yahoo.co.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○ 真宗共学会 --- 毎月第1と
第3木曜日午後7時より。
* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答⑫ 還相回向の利益

F 「阿弥陀仏はすべてのものを救済するのに、浄土に生まれさせるという法を与えて救おうとされる、とお聞きしています」
D 「その通りですね。この世で浄土に生まれる身とならせていただく、それがそのままこの世から救われることです。そしてやがて一生を終えて浄土に生まれて仏にさせていただくことが救済の完成です」
F 「よくたとえて、荒海で漂流している者が助け船に乗せられて海を渡り、やがて港に到着する。この世の救いは船に乗ることであり、やがて浄土に生まれて仏になることは港に到着することだといわれますね」
D 「そうですね。浄土に生まれて仏になる、それによって個人の救いは完全に成就し完結します。しかしながら、浄土に生まれて仏になるということは、それに留まらず、すぐさま阿弥陀仏の利他の活動の一つになつて、今度は迷い苦しむ衆生を救う無窮の活動に入ると仰せられています」
F 「自分が阿弥陀仏に救われて仏になるといふ、それだけに終

わるのではなくて、仏の身になるということには苦しみの境界(穢土)に還つて全ての衆生を救うべく働く、そういう身になるということですね」
D 「我が身が救われるのを自利といい、他を救うていくのを利他といいます。ですから阿弥陀仏に救われるということは、私における自利と利他の功德がともに成就することになるのです。さらにいえば、浄土に生まれるのは衆生を救うために生まれるというのが、浄土教の本来の意義なのです」
F 「私が浄土に生まれると、今度はその私が衆生を救うために迷いの世界に還つてくるという、そのところがまだモヤモヤしています」
D 「浄土に生まれさせていたただいた私が、また迷いの世界に還つてくるという場合、浄土に生まれるとその(私が)という自我の殻が滅して阿弥陀仏の働きと一つになるわけですから、迷いの世界に還るといっても何か一個の私の延長のようなものが還るといふようなものではないでしょう。浄土では個我性は当然消えて、佛の智慧そのもの

になるといわれます。塩でできた塩人形が海に帰れば海そのものとなり、形ある雲も晴れば大空そのものに帰るように」
F 「浄土に生まれると(私という個我)は消えて大悲の仏智と一つになるのですね」
D 「そうお聞かせて頂いています。このように私たちが浄土に往き生まれる相(すがた)を往相といい、浄土から穢土に還つて救済活動をする相を還相といいますが、往相も還相も阿弥陀仏の大悲のはたらきなのです。阿弥陀仏から与えられる恵みなのです。そこで阿弥陀仏が私どもを往相させてくださる恵みを往相回向といい、また私どもを還相させてくださる恵みを還相回向と申します。回向というのは阿弥陀仏から私どもにめぐらし与えられる恵みのことです」

*

F 「私における往相も還相も阿弥陀仏(南無阿弥陀仏)の回向によって実現するのですね」
D 「ええ。聖人の正像末和讃に
南無阿弥陀仏の回向の
恩徳広大不思議にて
往相回向の利益には
還相回向に回入せり
とあります」
F 「私たちが往相回向の利益をいただくと、(還相回向に回入せり)といわれますが、いつ還相回向に入るのでですか」
D 「往相回向に利益にあずかれ

ば、一生を終えて浄土に生まれて(還相回向に入らせていただく)とお聞かせ頂いています。それで十二分に有難く感じています」
F 「私における還相回向の利益はひとたび浄土に生まれた上での働きであるということですね」
D 「聖人は『教行証文類』の(証卷)に還相回向は私どもの証りの結果としての働きと示されています。ですから証(仏果)りを得てから還相回向に入ると見られます。このご和讃は、南無阿弥陀仏の恩徳は私たちを往相せしめ、それによって還相せしめてくださる。南無阿弥陀仏にはそういう不思議で広大な自利利他のお徳があることを讃仰されているのです」
*
F 「南無阿弥陀仏の中に私をして、往相(自利)せしめそれによって還相(利他)せしめてくださるお徳があるのなら、南無阿弥陀仏を頂いた人にはこの世で利他する働きはないのでしょうか」
D 「私たちは他の人々を幸せにしたい(利他)という心からなる永遠かけての願いがあります。ところが私たちは自らの無明煩惱によって人々を幸せにするどころか自害害彼で、人々を害して生きている現実があります。そういう罪深い宿業の身としての私たちですから、いかに南無阿弥陀仏をいただいてもこの世

で人々を限りなく救うていくよ
うな利他の徳を実現することは
とてもできません。ところが阿
弥陀仏は南無阿弥陀仏を与えて

くださることによって、私たち
を浄土に生まれしめて私たちの
無明煩惱の罪を浄化し、仏の身
にならしめ衆生を救うものたら
しめてくださいます。ですから
還相利他は死後を期してのこと
といわれています。しかし、こ
の世で私たちが自利利他の广大
な徳をもつ南無阿弥陀仏をいた
だいたので、自利のみな
らず利他する徳が南無阿弥陀仏
の働きとして流れ出てくること
はありえるのです」

F 「南無阿弥陀仏の中に自利利
他の働きがあるのだからそれを
いただく人はたとえその人が罪
悪深重煩惱具足の凡夫でも、な
お利他の働きが現れえるという
ことですね」

D 「ええそうです」
F 「それはどのようなものでし
ょうか」

D 「聖人はこの世で浄土に生ま
れることの定まった人は現生(こ
の世)において十種の益をいた
だくといわれていますが、その
中に〈知恩報徳の益〉とか〈常
行大悲の益〉などが与えられる
といわれています。これらの利
益は南無阿弥陀仏の利他のお徳
と深く関連していると思います」
F 「知恩報徳の益というのは」
D 「如来・聖人の御恩の深さが
知らされ御恩を喜び、おのずと

その御恩に応えていきたいと願
いかつ働こうとするそういう利
益です。ご和讃にも

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

とあります。この世において、
こういわずにはおれないような
報恩の心が与えられる、それだ
けでも大変な功德だと思います」
F 「では常行大悲の益とは」

D 「常行大悲の益とはお念仏は
如来大悲の行(はたらき)です
から、常にお念仏に親しみお念
仏を喜ぶことは、自然に如来大
悲の行を行じていることになり
ます。仏の大悲がこもっている
お念仏が周りの人たちに伝わり、
人々に流れていくことは、仏心
大悲のお心が人々の心に浸透し
ていくことになります。こうし
て仏のお徳がお念仏を通して、
おのずから社会に流れ、浄らか
な仏のお心が世の中を浄化して
いくのです。しかし、それは念
仏申す人が意識されるべきもの
ではありません。自然に吹いて
くる涼しい風が人々の心を和ら
げるように、欲と怒りに燃えあ
がっているこの世界に清浄な大
悲の風が吹いて、濁悪の世を浄
化していくのであります」

*

F 「こうした現生の利益を浄土
に生まれる前から与えられる還
相回向の利益のすがただと受け

取ることが出来ないでしょうか」
D 「還相回向の利益とこれら現
生の利益とは私どもを利他にあ
ずからしめる同じ南無阿弥陀仏、
として本質的に一つであるとい
えましょう。しかしその場合、今
から私は還相利他の働きをして
いるのだ」というように受け取
られるべきではないでしょう。
大悲の行を行じるという場合で
も、それはどこまでも私を救い
たもう南無阿弥陀仏の働きであ
って(私がしている)というも
のではありません」

F 「ややもすると(私は信心頂
いたから私は利他の働きをして
いるのだ)と受け取りかねない
のですね」

D 「ええ、ですから私における
現生の功德利益としての利他の
働きはどこまでも私の上に働き
たもう南無阿弥陀仏の働きとし
てなされてくるものであります。
です。それはちようど磁石(阿
弥陀)に鉄(私)が触れると、
その鉄が小さな磁石となって他
の鉄を引き寄せるようなもので
す。鉄がたとえ磁石のような働
きをしてもそれは自分の力では
なく、もとの磁石の磁力が鉄を
通して鉄を一時的な小さな磁石
にかえるようなものです。鉄が
たとえ磁石化しても鉄を離れた
らただの鉄でしかないようなも
のです。あくまでももとの磁石
あつてのことです。この世で南
無阿弥陀仏に触れた人を通して
南無阿弥陀仏のお徳が周りの人

たちに浸透していくことはある
のですが、それはどこまでも南
無阿弥陀仏のお働きのほかには
ありません。そんなことで、こ
の世において南無阿弥陀仏から
与えられる(利他する利益)を
還相回向の利益とまでいわなく
て、(私にいただく利益)として
は現生の利益である知恩報徳と
か常行大悲の益で言い尽くされ
ていると私は思います」

*

F 「では私の意識においては還
相回向の益ということは死後、
浄土に生まれてからのことであ
つて、現在の私にはそれをうん
ぬんする必要はないのですね」
D 「そうなんです、ただこの
世で将来に賜る還相回向の利益
を現在から有難く思うことは当
然あります。(やがて還相させて
下さる有り難さ)、如来大悲のご
恩をこの世において感じるとい
うことは充分あるのです。ご和
讃にも

往相回向の大慈より

還相回向の大悲をう

如来の回向なかりせば

浄土の菩提はいかがせん

というのがあります」

F 「なぜ聖人は還相回向という
ことを強調されるのでしょうか」
D 「というのは、自分だけが救
われてよしとするのが仏教の本
意でもなければ、人間の本心の
願いでもありません。自分も救
われ他の人々も救われていく。

自他共に救われたいというのが
人間の心の底からの至純な願い
であり、また仏教の心でもあり
ます。亡くなった親はどうして
いるであろうか。先だった子は
どうしているのだろうか、また
私が浄土に生まれたとしても、
残された者たちはどうなるであ
ろうか。人間にはそういう悩み
があり、悲しみがあります。そ
の悲しみをすでに阿弥陀仏は知
り抜いて下さつて、私を浄土に
生まれしめることを通して、や
がて人々(衆生)を救う徳を与
えようとされています」

F 「自分の救いもさることなが
ら、他の人々の救いをどうする
か。利他の問題は人間の根源の
問題ですからね」
D 「そうなんです。そこを歎
異抄には、聖人の仰せとして

一切の有情は、みなもつて
世々生々の父母兄弟なり。い
ずれもいずれも、この順次生
(次の世)に仏になりて、た
すけそうろうべきなり。

(乃至) いそぎ浄土のさとり
をひらきなば、六道四生のあ
いだ、いずれの業苦にしずめ
りとも、神通方便をもつて、
まず有縁を度すべきなり。

とあります。これは還相回向の
大悲を有難くいただかれています
お言葉といえます。ですから還
相回向の益は現世に生きる私た
ちのたいなる喜びであり、希望
であります(了)

歎異抄第十八章第五講

かつはまた檀波羅蜜の行ともいふべし。いかにたからものを仏前にもなげ、師匠にもほどこすとも、信心かけなば、その詮なし。一紙半銭も、仏法のかたにいれずとも、他力にこころをなげて信心ふかくは、それこそ願の本意にてそうらわめ。すべて仏法にことをよせて世間の欲心もあるゆえに、同朋をいいおどさるるにや。(歎異抄第十八章)

(現代語訳)

一方、その寄進は、仏になるための布施の行ともいえるのですが、どれほど財宝を仏前にささげ、師に施したとしても、本願を信じる心が欠けていたなら、何の意味もありません。寺や僧に対して、たとえ一枚の紙やほんのわずかな金銭を寄進することすらなくても、本願のはたらきにすべておまかせして、深い信心をいただくなら、それこそ本願のおこころにかなうことでありましょう。

結局、世俗的な欲望もあるために、仏の教えにかこつけてこのようなことをいい、同じ念仏の仲間をおどされるのでしょうか。

(語句の説明)

檀波羅蜜——さとりに到るために行う布施の行。

同朋——法(教え)を同じくする仲間。

「仏法のかたに、^{*} 施入物の多少にした

がいて、大小仏になるべし」というようなことを言つて、仏法の方に布施(施入物)を勧めるのですが、それはあえていえば檀波羅蜜の行という布施波羅蜜のこととて、これは聖道門での修行なのです。しかし、私たちは浄土の教えに帰依し、本願を信じ念仏申す道に入っているのであつて、檀波羅蜜行を行うことによつて浄土に生まれようとしているのではありません。

弥陀の浄土に生まれる道をあゆんでいるものにとつては本願を信じる信心一つが肝要です。もし信心が欠けているのなら、たとえ布施の行のマネをして、寺院に寄進したり、仏法の師匠に布施しても、それでもつて浄土に生まれることはできないのです。すなわち自分自身の救いにとつて意味のあることにはならないし、仏のお心にもかなわないと唯円房はいわれるのです。

ここで唯円房が言われる「信心がなければいかに寺や僧侶に寄付や布施をしても自分自身の救いのためには意味がない」という言葉は教団や寺院にとつてはいささか厳しい言葉のようです。しかし、これは真宗に限らず、他の宗教教団においても、共通したものでありましょう。要するに寺や教団にどれほど寄付しても自分自身の救いを離れるなら、寄付した人自身にとつては意味がないといわれるのです。

ただし、その人の寄付が他の人たちが救われるために使われることにもなるとすれば、それは客観的には意義のあることとであります。

ただ、ここで唯円房は「本願を信じる信心こそあなたにとつてただ一つの大事なのだ」と指摘し、仏法に関わる私たち

にとつて「何が肝要であり、何がゆるがせにすることの出来ない一大事であるか」、そのことに目を向けさせようとの思召しでもありましょう。

そしてまた、「仏法のために多く寄付すれば、大きな仏になり、少ししか寄付しなければ小さな仏にしかならない」といつて寄付を募るといふのは「仏法にことをよせて世間の欲心もあるゆえに、同朋をいいおどさるる」と批判をしておられるのです。すなわちこのようにいつて人を驚かすのは、財貨をむさぼろうとする野心からではなかるうかと厳しく批判されているのです。このことは今日でも姿を変え形を変えて寄付行為を求める宗教教団にとときどきみられます。

^{*}

ところでなぜ教団や寺や師への布施が大事かという点、仏法は主に僧伽(教団)によつて私たちのところまで伝達されてきました。その歴史によつて私たちが仏法にあうことが出来るのです。

下手なたとえでいいますと、家庭の蛇口から水をくみ出すことができるのは、水をためた水源地から水を浄水場に引き、それを長い水道管に送り出して、それぞれの家庭にまで水が運ばれてきます。家庭まで水道管で送られてきてこそ、私たちは蛇口から水を取り出すことができます。

そのように、釈尊がお説きになった仏法は、釈尊から直接私たちに与えられるわけでは当然なくて、それを受け継ぎ伝えてきた教団(僧伽)——人とそれを支える財物——によつて、今日私たちのところまで仏法が伝えられ、その恩恵に私たちがあずかることが出来るのです。

^{*}

そしてそれら教団の存在意味は要するに「一人ひとりが仏法にであひ、仏法に救われる」ためであります。その「一人ひとりの人」とはまずもつて(私自身)であるはずで、仏法がこの私自身をはずしてだれか他の人のためにあると考えているなら、それは仏法にたいしての傍観者であつて、その人自身には仏法の全体が意味をもたないこととなります。

私自身が仏法にであうこと、それは「他力にこころをなげて信心ふかく」あること、そのことこそが仏の願いにかない、またそここそ自己自身の本心にかない、「私自身にとつて」仏法の全体が意味あることになるのです。もし(仏法の信心)が欠けるなら仏法は自己にとつて「その詮なし」であります。

今日、真宗教団がふるわない原因は、やはりこの一点がおろそかになっているからであります。いかに教団に深くかかわり、いかに教団に財を寄付し、いかに教学の勉強を重ねても、自分自身が本願を信じて救われるあるいは救われたいということがなければ、仏法も教団もその人にとつて本質的には「あつてもなくともいいもの」でしかありません。そうなるとその人が教団に属しているのは(たまたま)であるし、せいぜい生計を立てるに必要な組織にすぎません。生計のために必要ななら、別にその教団に関係しなくても、あるいは仏法に関係しなくても、ほかにいくらでも生活方法はあるのですから。

自己一人における仏法に対する信が常に問われているのであります。

(了)